

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-23

〈史料紹介〉 在サンクトペテルブルク・ロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵世俗文書 補訂： 關尾史郎氏紹介の戸籍様文書・水利 文書を中心に

小口, 雅史 / OGUCHI, Masashi

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI-SHIGAKU : Journal of the Hosei Historical Society / 法政史学

(巻 / Volume)

85

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

36

(発行年 / Year)

2016-03-24

〔史料紹介〕

在サンクトペテルブルク・

ロシア科学アカデミー東洋写本研究蔵世俗文書補訂

—關尾史郎氏紹介の戸籍様文書・水利文書を中心に—

小口雅史

はじめに

ロシアのサンクトペテルブルクにあるロシア科学アカデミー東洋写本研究所に所蔵されている敦煌文書（実際には吐魯番（トゥルファン）をはじめ和田（コータン）や黒水城（カラホト）などから出土したものが含まれていることは周知の事実である^①）については、フランスやイギリス、あるいはドイツの敦煌・吐魯番文書コレクションに比して、複数の探検家（コスロフ、オルデンブルク等）のみならず、中央アジアに

派遣された外交官（ソコフやクトコフ等）が蒐集したものもあることからその由来や構成が複雑で、その整理はかな

り厄介である^②。『俄蔵敦煌文獻』全一七冊（上海古籍出版社・俄羅斯科学出版社東方文学部、一九九二年～二〇〇一年）の完結によって、ようやくその全貌がみえてはきたが、なおそれ^③に含まれない史料も多数存在しており、その全貌の公開が待たれるところである。

しかしながら『俄蔵敦煌文獻』の公刊の意味は言うまでもなく大きく、私どもがとくに強い関心を抱く社会経済文書類についても、その研究が一気に進展していった^{④⑤}。

さらに近年、直接ロシア科学アカデミー東洋写本研究所に赴き、従来あまり知られていなかった小さな断簡の戸籍様文書を、原文書に即して検討した關尾史郎氏による研究

も公刊されていることは重要な成果として注目できる⁽⁶⁾。小断簡であっても残存する史料の絶対数が少ない古代史研究にとつては貴重な史料となり得るから、こうした不断の努力を続けることには大きな価値がある⁽⁷⁾。

幸い、筆者もロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵の断簡類の調査について、JSPSより科学研究費補助金の交付を得ることができ、二〇一五年六月に現地において關尾氏の成果に導かれながらあらためて原文書に即した検討を施すことができた。結果として、わずかながら關尾氏のデータを訂正することができたので、この場をお借りして、その成果の一端を披露することとしたい。

一 關尾史郎氏によって紹介された戸籍様文書類

關尾氏は、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵の戸籍様文書として、新たに以下の六点について紹介している⁽⁸⁾。それに即して順番に簡単なコメントを付していきたい。またそれらについて、今回、東洋写本研究所の許可を得て、新たに『俄藏敦煌文献』よりも高精細の写真を入手することができたので、それらも本稿末尾にまとめて掲載し、今後の研究の参考に供することとする。

① Jx08519v (正しくは、Jx08519r) (写真①)

五胡時代年次未詳高昌郡高昌縣都郷残戸籍

サイズ訂正 八・五×七・八⁽⁹⁾

釈文や考察については異論がない。關尾氏の考察通りである。ただし別面の仏典を關尾氏は「未詳」とするが、『中論』(龍樹造、鳩摩羅什譯・青目釋)のうちで、大正蔵で T1564.30.0012b28 ~ T1564.30.0012c05 の部分に該当する。一行あたり二〇字で書写されたもの。

② Jx08580v (正しくは、Jx08580r) (写真②)

唐年次未詳西州残戸籍

サイズ訂正 七・五×一・三

釈文や考察については異論がない。ただし文字の付近に朱の痕跡を感じるが確実ではない。

別面の未詳典籍について五行とあるが、おそらく六行か。

③ Jx08726v + Jx08848v (正しくは、Jx08726r + Jx08726 Ir

+ 番号未詳断簡) (写真③)

唐年次未詳西州残点籍様(?)

サイズ訂正 五・七×六・九、二・三×四・二、二・二×一・七

釈文や考察については異論がない。別面を「仏教関係文

書」とするが、「十方諸佛等」「及謗」「諸罪」などの字句を共通に含む仏典として、知昇撰『集諸經禮懺儀』がある。おそらくこれであろう。

④ IX09368v (正し)は、IX09368r (写真④)

唐年次未詳(七世紀?) 西州残戸籍

サイズ訂正 一一・二×一一・二

釈文や考察に異論はない。ただし關尾論文での版組みだと、各文字の位置関係は必ずしも正確ではない。写真④を参照されたい。書体はベルリン蔵の戸籍類にもままみられる、ペンのような硬い細いもので書かれたことに由来する⁽¹⁾。別面の紙縫注記に「縣」の字があることは關尾氏の指摘通りだが、さらに継目印が捺されている。印文は「□縣印」か。残念ながら右側が欠けていて地名が読みとれない。印のサイズは縦五・二。別面の仏典については、かなり多くの文字が記されているものの、既存の仏典データベース類ではうまくヒットしない。

⑤ IX11347v (正し)は、IX11347r (写真⑤)

唐年次未詳西州残戸口簿(?)

サイズ訂正 四・〇×七・二

釈文や考察については基本的に従うべきであろうが、三行目の一字目、二字目については検討を要するか(写真⑤参照)。なお別面の未詳仏典は四行ではなくて五行存する。

⑥ IX18955v (正し)は、IX18955r (写真⑥-1)

唐開元年間(?) 敦煌縣神沙郷戸籍(?)

サイズ追加 五・七×八・三

關尾氏はこれについては原文書を閲覧していないが(理由は不明)、私の今回の調査では閲覧可能であった。計測値を追加した。当該文書の包紙の乱雑なメモ書きによれば、これがIX528r(写真⑥-2)と関連するという。そこであわせてIX528をも閲覧したところ、たしかに別面の「之」の字の習書が共通し、戸籍面の書体も近い。

關尾氏はIX18955を「唐年次未詳(七世紀?) 西州残戸籍(?)」とする。根拠として、敦煌戸籍では応受田額記載において、冒頭に「合」字が記載されるが、本文書ではそれが確認できないことを挙げる。しかし原文書に即して検討すると、「応」字の上に文字があったかかったかは現状では不明とせざるを得ない。

ところでこの文書と関連する可能性が極めて高いIX528については、チュグイエフスキー氏は、敦煌縣神沙郷戸籍

とし、開元七年戸籍の可能性を示唆する。⁽¹³⁾ その根拠は別面の印の残影を「敦煌縣之印」の輪郭とすることにあり。ただしJx028の印影は不鮮明で印文を読みとめることは困難である。もともとJx028の末尾の方に「煌縣 神（郷）」の文字が明瞭に読み取れるので、既知のように敦煌縣神沙郷戸籍とみてよい。であれば、Jx028と関連する可能性が高いJx18955も、關尾氏が指摘したような西州戸籍ではないということになるろう。

ちなみにこの戸籍の料紙は、灰色で混みいった繊維が容易にみてとれる、いささか質の悪い紙である。

二 吐魯番盆地の水利関係史料

—Jx02683v + Jx11074v 補記—

關尾氏は、ロシア科学アカデミー東洋写本研究蔵の世俗文書として、吐魯番盆地の水利関係に関する、二断簡からなる文書についても、原文書に即した史料紹介を公刊している。⁽¹⁶⁾ そこで整理されているように、この文書については關尾氏以前にも多くの研究があるが、この文書を明確に吐魯番で作成されたという認識に立って分析したのは關尾氏が初めてである。

私もロシア科学アカデミー東洋写本研究所に赴いた際

に、当該文書についても調査させていただいた。ただし当該文書については、原文書による閲覧許可は下りたものの、補修が必要な状況であって、戸籍様文書断簡類とは異なり、残念ながら現時点での高精細写真の入手は不可であった。機会を改めて入手することとしたい。当面は、必ずしも鮮明ではないけれど、『俄藏敦煌文献』九（上海古籍出版社・俄羅斯科学出版社東方文学部、一九九八年）・三三二頁掲載の写真によるしかない。なおここに掲載された写真は、Jx02683（大きい断簡であるI）とJx11074とを上下に接合させた状態で撮影されたもので、あわせてその脇にJx02683に属するもう一つの小断簡のIIが置かれている。この小断簡Jx02683のIIが、直接接続はしないものの、Jx02683のIとJx11074と同一個体に属するものであることは、別面が同じ「黄帝内經素問」であることから確実である。⁽¹⁷⁾

まず文書のサイズであるが『俄藏敦煌文献』は写真にスケールを入れておらず、計測などは原文書にあたるしか手段はない。今回あらためて原文書に即して再計測したところ、關尾氏の数値を訂正することができた。Jx02683のIについては、二四・六×一三・〇。同IIについては關尾氏の計測通り。Jx11074については二四・八×二一・五という数値が得られた。

また包紙には別な番号がさまざまに記されており、整理の進展によって、番号も変化していったことが窺える。同一文書について研究論文によって文書番号が違ふことがあるのはそのせいであろう。ただしどの番号で請求しても出納できるようで、出納担当者は内部的になんらかのコンコードンスのようなものを用いているらしい。

釈文については、文字自体については關尾氏の見解の通りであった。ただ最後から二行目(□慶保参……)と三行目(李隆□……)の行間の一文字を□としているが、これは「次」と読みきつていいと思う。ただし各行相互の位置関係は必ずしも原文書の状態を忠実に再現されていない。⁽¹⁸⁾また中央の「右石垂渠……」の行については、字の大きさを三ランクに分ける工夫が必要か。これらについては『俄藏敦煌文献』九掲載の写真を参照されたい。位置関係だけはこのやや不鮮明な写真によっても十分校勘できる。

なお T_X02683 の II の「黄帝内經素問」が書かれた面には、それとは天地を逆にして「千廿二頃十」という、かなり薄い墨で記された文字があるが、これは關尾氏が指摘しているとおおり、水利関係文書とは無関係の別な記述ないしメモ書きととるべきであろう。

文書の作成年代や、文書の性格ないし機能についての關

尾氏の精緻な論考に、今あらためて付け加えるべき点はない。

むすびにかえて

以上、關尾氏の先駆的な業績に導かれながら、新たに学界に提供された社会経済文書類について、原文書に即した再調査により、若干の訂正作業の結果報告をおこなわせていただいた。

本稿冒頭でも触れたように、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所には『俄藏敦煌文献』に収められた㊦ナンバーの整理番号を有するものと㊮ナンバーの整理番号を有するもの以外にも、漢文文献に限ってもなお七〇〇件以上の史料が存在する。とくにクロトコフ収集史料中に数点の戸籍関係文書があることは確実で、今回の調査時に、私と同行した辻正博氏は、S_LKr. IV_654 (→S5376) 天寶歲籍帳(?)を閲覧して、私も辻氏の調査終了後に閲覧させていただいた。この籍帳は本稿一の④ T_X09368で紹介したのと同じ硬い細いペンを用いたような書体で書かれているが、私の閲覧申請分ではないこともあり、今回はその詳しい紹介を省略する。

東洋文庫蔵のマイクロフィルムの整理が終わり、ロシア

科学アカデミー東洋写本研究所蔵の漢文史料の全貌が明らかになる日の近いことを念じつつ、とりあえずここで擧筆することとする。

註

(1) 榮新江『海外敦煌吐魯番文獻知見録』(江西人民出版社、一九九六年)他参照。またそのリストとして關尾史郎編「ロシア、サンクトペテルブルグ所蔵敦煌文獻中のトゥルファン文獻について」『敦煌文獻の総合的・学際的研究』(平成十二年度新潟大学プロジェクト推進経費〈学際的研究プロジェクト〉研究成果報告書、新潟大学人文学部、二〇〇一年)がある。

(2) I・F・ポポヴァ「一九世紀末から二〇世紀初頭におけるロシアの中央アジア探險隊」『シルクロード 文字を辿って—ロシア探險隊収集の文物』(特別展覧会図録、京都国立博物館、二〇〇九年)他参照。

(3) ♀ナンバーの整理番号を有するものと♂ナンバーの整理番号を有するものが収められている。

(4) 東洋文庫には、二〇〇二年に世界にさがけて入手した東洋写本研究所の内陸アジア出土文書マイクロフィルム(全三六三リール、約二五万コマ)が存在し、四・五世紀から一五世紀に及ぶコータン・サカ語、西夏語、チベット語、ウイグル・ソグド語、漢語、チャガタイ・トルコ語、サン

スクリット語、アラビア語、ペルシア語、満洲語、モンゴル語の—言語の文書が含まれているとされ、漢文文獻に限っても、『俄蔵敦煌文獻』に含まれない文獻がなお約七〇〇件あるという(二〇一四年度公益財団法人東洋文庫事業報告書)。

(5) その主要なものについては、『俄蔵敦煌文獻』の刊行に先だって、ロシアのチュグイエフスキーによって二二点二八断簡が紹介され(И. И. Чугуйевский, *Kumakskie Dokymy iz Jnyehyru, Mokra, 1983*)、王克孝の訳によって日本でも広く知られるようになっていた(丘古耶斯基著〈王克孝訳〉『敦煌漢文文書』(上海古籍出版社、二〇〇〇年)。また山本達郎・土肥義和共編『敦煌吐魯番社會經濟史料(二) 籍帳』*Tunhuang and Turfan Documents concerning Social and Economic History II Census Registers* (東洋文庫、一九八五年)でもチュグイエフスキーの成果によりながら二二点一八断簡が紹介された。しかしながら『俄蔵敦煌文獻』の刊行によって、その写真(必ずしも良質のものではないが)が公開されたことは斯界の研究を大きく進展させた。

(6) 關尾史郎A「サンクトペテルブルグ蔵、戸籍様文書簡介」『法史学研究會会報』八、二〇〇三年)。なお關尾氏には関連してB「サンクトペテルブルグ蔵、JX02683v + JX11074v 初探—トゥルファン盆地の水利に関する一史料—」(『中国水利史研究』三〇、二〇〇二年)もある。以上二編は、平成十四年度〜平成十六年度科学研究費補助金(基盤研究)(B)

(2) 研究成果報告書『ペテルブルグの文書館史料を用いた、ユーラシア諸民族の多元的宗教生活の歴史的研究』（研究代表者・鈴木佳秀、二〇〇五年）に再録されており（ただしリプリントではなく組み直されている）、本稿での引用はいずれもこれによる。

(7) 拙稿「マンネルヘイム断片コレクション中の戸籍様文書等について」『風義人先生古稀記念論集』『文化史料考證』（文化史料考證刊行委員会、二〇一四年）他参照。

(8) 關尾註(6) A前掲論文。

(9) 本稿では、サイズの単位はすべてcmである。

(10) 研究所での整理上はr面であるが本来はv面とすべきところ。r面・v面の誤りはベルリン国立図書館の吐魯番書整理においても頻出するが、史料の出納上はこのままで表記せざるをえない。

(11) 藤枝晃「軀 敦煌千佛洞二二〇窟壁画の願文より」『言語生活』三五九、一九八一年、同「いま、敦煌・トルファン研究は」『創造的市民』四、一九八四年）他参照。

(12) JKS28は二断簡からなるが、小さい方の断簡の習書が「之」で、大きい方の断簡の習書は「蘭」である。

(13) 註(5) 前掲『敦煌漢文文書』七二頁。

(14) JKS1895にも印影があるが、左半分なので地名部分が存在しない。

(15) 山本達郎・土肥義和共編註(5) 前掲書でⅧ号文書として積文が掲載されている。

(16) 關尾註(6) B前掲論文。

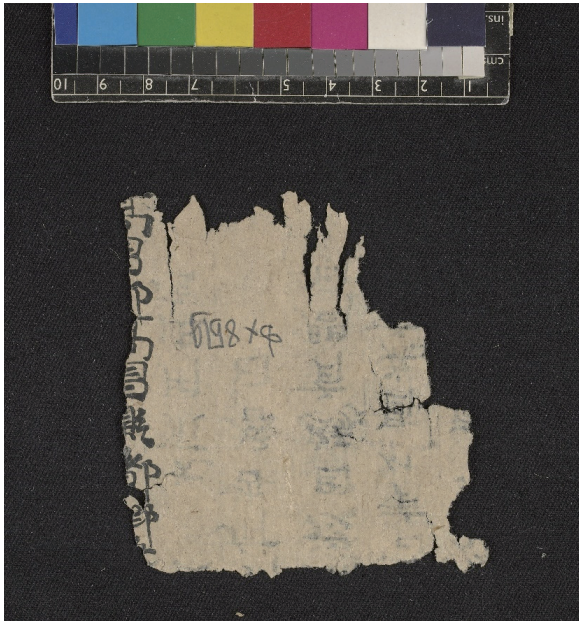
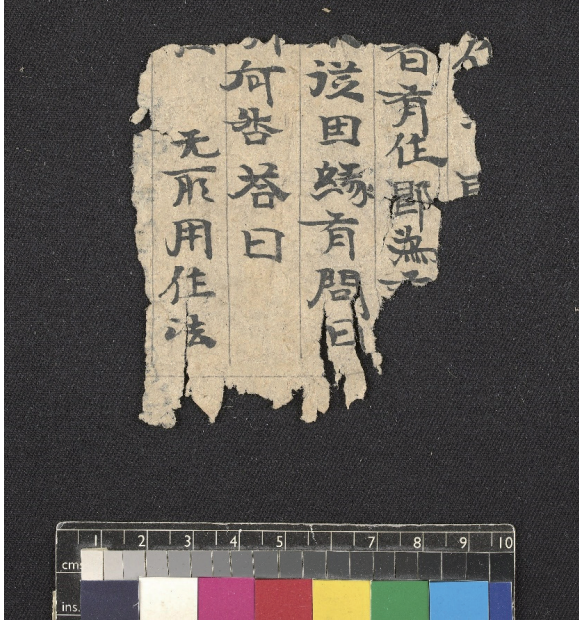
(17) 關尾註(6) B前掲論文。

(18) 文書の組み方としては、關尾註(6) B前掲論文のうち、初出誌の方がはるかに原文書に忠実で、組み直された再録誌の方ではかなりずれてしまっている。ただし初出誌でも、原文書と比較すると配列に多少のズレがある。

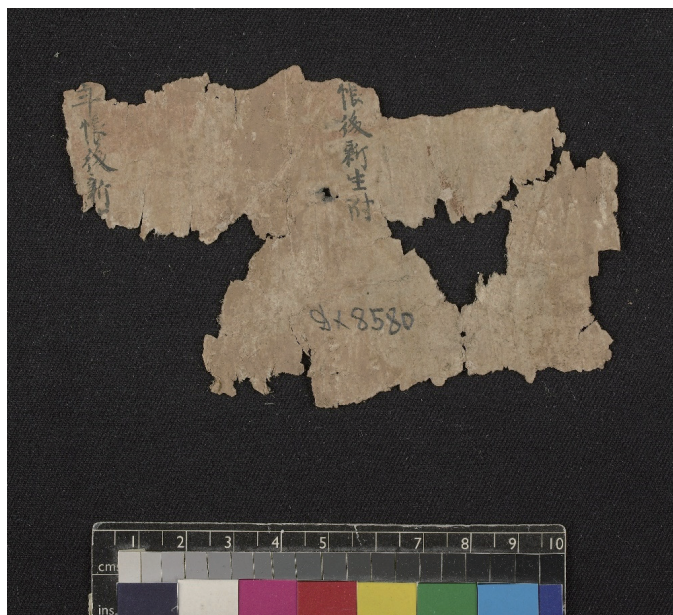
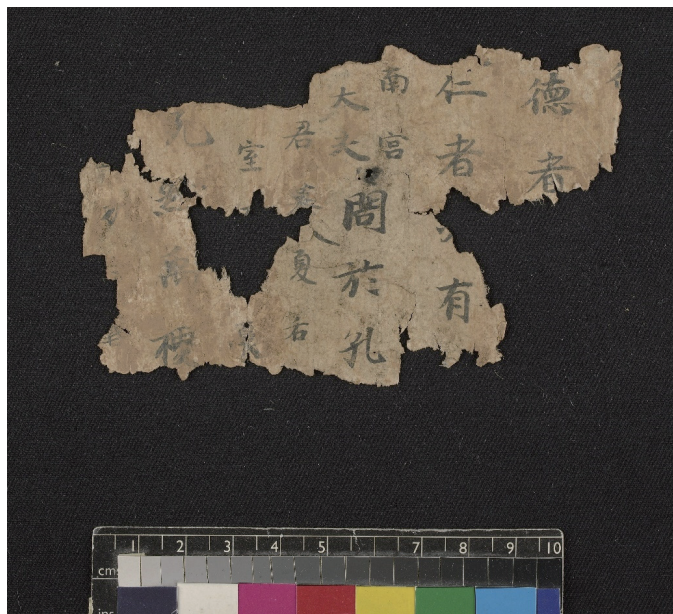
(19) 事前に関覧申請をしたのは、手許の控えではSLK: IV_815であった。

〔謝辞〕ロシア科学アカデミー東洋写本研究所での原文書閲覧に際しては、I・F・ポボヴァ女史および辻正博氏に大変お世話になった。末尾ながら記して謝意を表させていただきます。

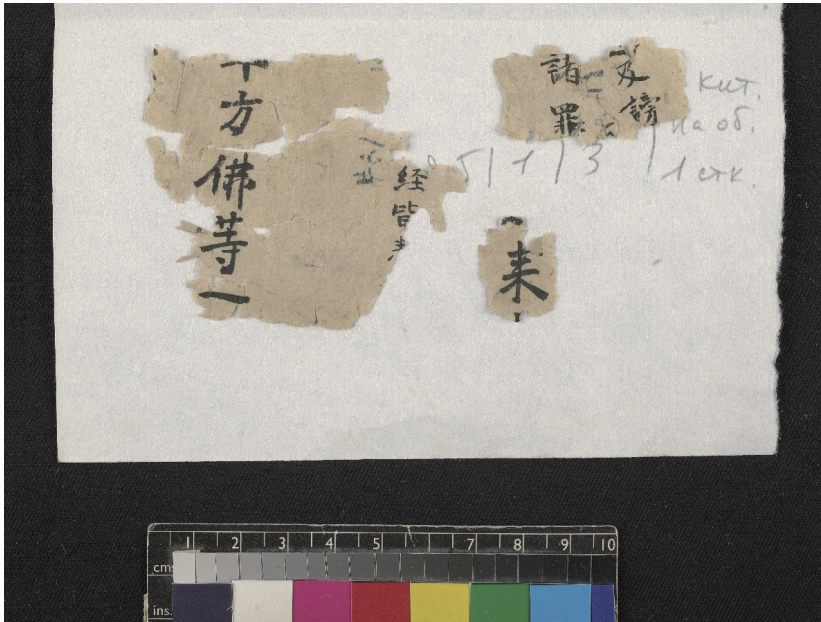
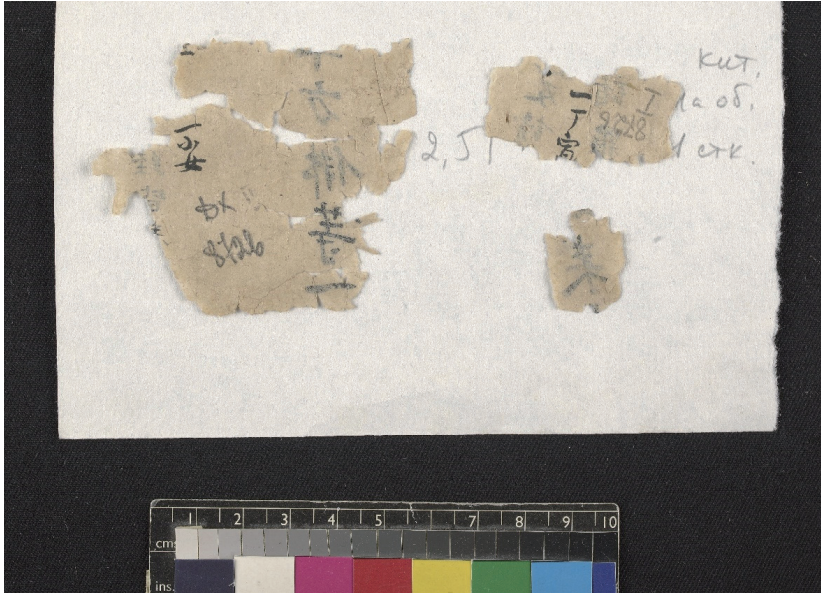
なお本研究はJSPS科研費15H05160の助成を受けたものです。



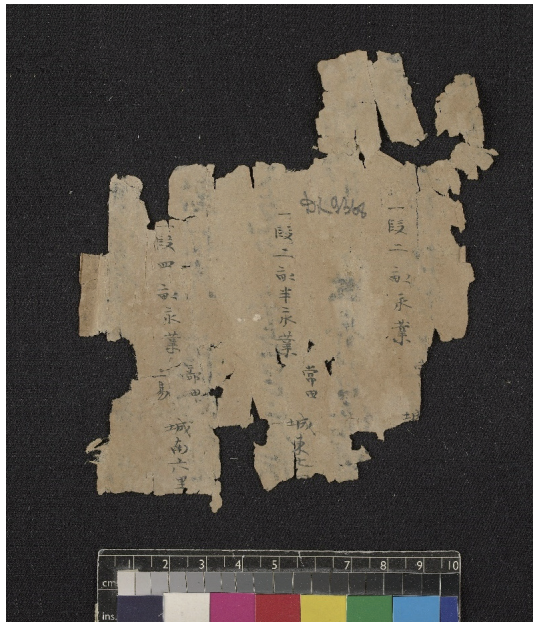
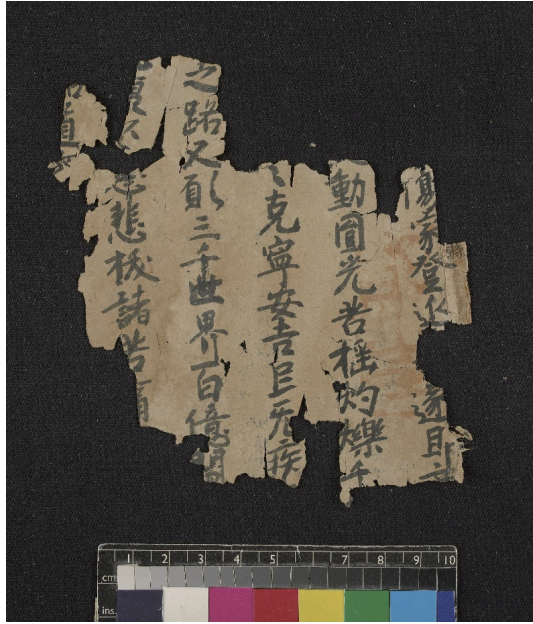
写真① D x 08519



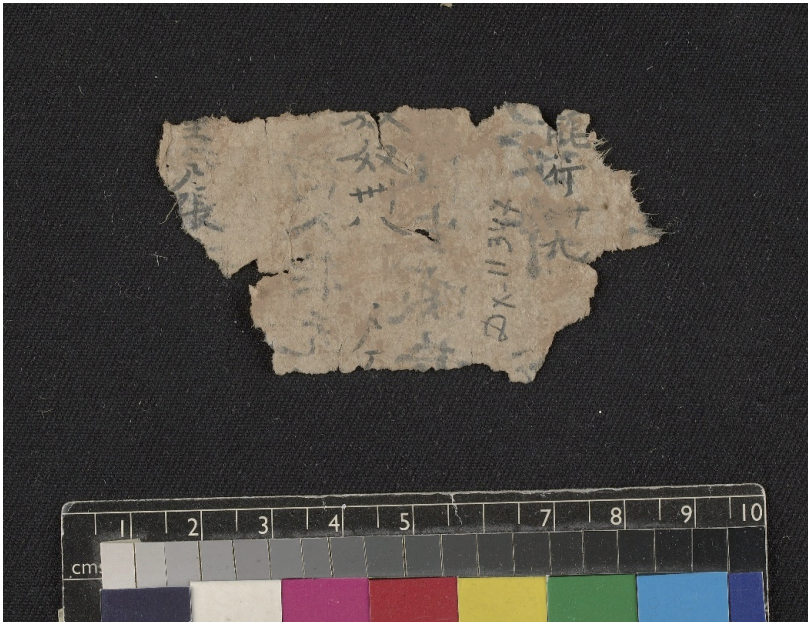
写真② Д x 08580



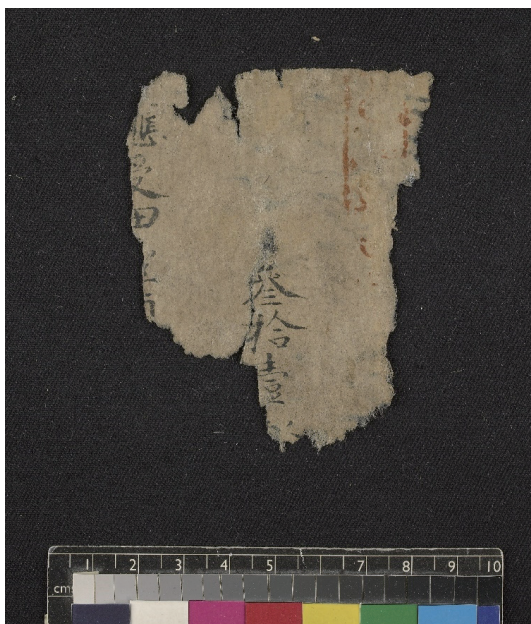
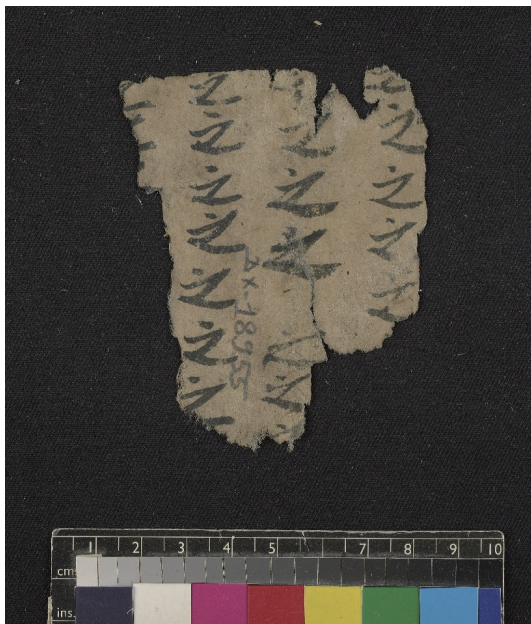
写真③ Д x 08726+ Д x 08848+番号未詳断簡



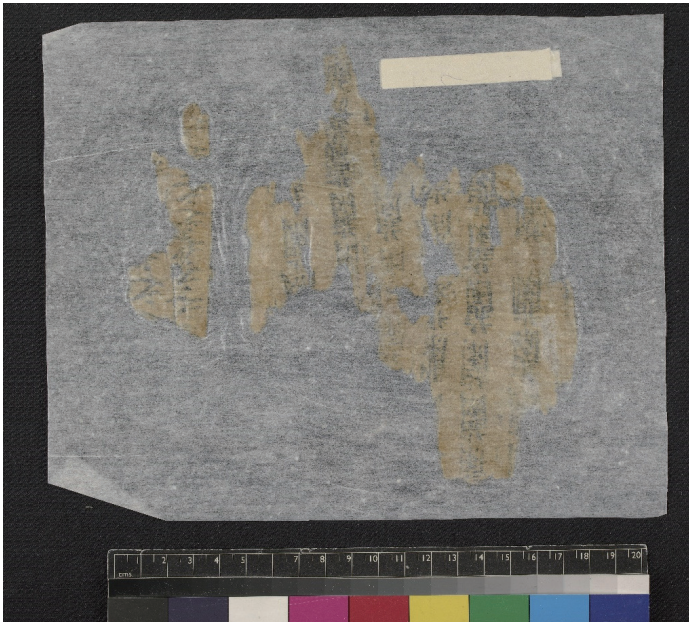
写真④ Д x 09368



写真⑤ Д x 11347



写真⑥-1 口 x 18955



写真⑥-2 Д x 528